

この井戸掘りの文献として残っているようである。それより、江戸中期と思われる。それからいろいろ改良され、上総掘りと言われるものが出てくるのが明治に入ってからである。この間県内のあちこちで普及していったものと思われる。それが長生地方の天然ガスの採取としてあらわれている。

こうしてこれは県外にも普及し、石油や、温泉（鹿児島）のボーリングとして使われ、遠くインドまで伝わり、「上総システム」として知られている。

〈略年表〉

文化14年・君津郡小糸町、池田久蔵、金棒の先に矢筈形の金具をつけ、20間掘る。

文政4年・十戸突井戸を掘る

明治16年・ひごを發明、200間～300間、

掘れるようになる。
・弁（バルブ）を考察される。

5. おわりに

まだまだ、調査不足であって、私としては道具そのものがどのようにして作られたか、まだ興味はつきない。

このような話しを授業のなかでやると、彼等の目にかがやきがある。（独りよがり）これからこのような授業をどう発展させればいいのか、考え込む。

調査してゆくなかで、いろいろな人と話しをするが、その中で「確かなもの」「根をはっているもの」を感じるとき、「焼酒やけた顔」が格別の顔にみえてくる。また私自身も「よかった」と痛感するのである。つまりん話をしました。（おわり）

（市川工高）

地域の技術史研究をめぐって

—— 産業考古学会の創立に寄せて ——

佐々木 享

I

わが国の近代産業の大部分は生まれて百年にもならないが、近代産業がもついわば本来の性格からして、絶え間なく技術の更新と拡張が続けられてきた。ところで私たちは、この近代産業の成長・発展の過程で、同時に、技術史あるいは広くは文化史上に記念されるべき産業上の無数の遺物、たとえば、各種の工具、機械、装置、建築物、施設等々がつぎつぎに破壊され、消失せしめられていることに注目しないわけにはいかない。産業上の遺物というべきものでいくらか保存されているのは、いわば運よく通信博物館などひじょうに僅かに散在する公共博物館に収納されているものほかに、多くの人達の郷愁を誘いま

たマニアから要求も強いSLくらいのものでしかない。不断の技術的發展は近代産業における技術の本性であるが、古くなった機械をさして「おくら入りだ」とか「博物館行きだ」などと云うこともあるように、古くなった機械類はいつも破壊されるわけではない。遺物として保存するつもりなら、そうすることだってできるし、イギリス、ドイツなど資本主義の先進国にみられるいわゆる産業博物館はそういう役割を果している。社会主義国の実情をあまり知らないが、一般に社会主義国では博物館の事業がひじょうに重視され発達しているから、産業史上の遺物の保存も行きとどいているにちがいないと思う。

しかし、外国のことはとにかくとして、わが国では、とくに第二次大戦後のいわゆる「高度成長」期をピークとして、無数の産業上の遺物の急速な破壊・消滅というプロセスが極めて急速に進行していることが、ようやく心ある人々の関心を引きはじめたことは注目されるべきであろう。技術教育研究会が開く毎年の大会において、「地域の技術史」分科会がほぼ安定した地歩を占めるようになったこともそうであるが、今年に入って、産業上の遺物に関して調査・記録をし必要なその保存をはかるという、これまでになかった領域の研究・活動をすすめることを目的とする「産業考古学会」が創立されたこともその顕著な動きの一つである。

産業考古学会とも称すべき研究会を創立しようという動きがいつ頃から始められたのか詳しくは承知しないが、私が招きを受けて相談会を兼ねた研究会に参加したのは昨年9月1日だった。学会のニュース創刊号によればこれが「第一回産業考古学会創設準備会」で、名称や性格・なすべき仕事・展望・参加を呼びかける範囲など、創立されるべき研究会の骨格は、ほぼここで固まったように記憶している。以後、数回の研究会と世話人会を重ねて問題を煮つめた末、77年2月12日(土)の午後、早稲田大学7号館小野講堂において、産業考古学会の創立総会が開かれ、約100名の参加者の賛同によって、同学会が正式に発足したのである。

産業考古学という聞き馴れない日本語がいつ誕生したのか詳細は承知しないが、Industrial Archaeology の訳語であり、ごく最近のことに属する。玉置正美氏によれば、もとになっている Industrial Archaeology ということばがイギリスではじめて活字になったのが1955年だというから、その訳語が聞き馴れないのは当然である。

産業考古学ということばや、それを研究会の名称に使うことについては、イギリスでも

議論があったといわれ、わが国でも学会創設の準備過程における重要な議論のひとつとなった。考古学では文字文化発生以前の時代が主たる対象とされるが、この産業考古学の対象は、このことばを最初に使ったといわれるリックスがいったように「産業革命の生んだ昔の時代の遺物の研究である」と考えられるから、考古学ということばを使うのは不相当ではないかという疑問もそのひとつである。(ここでいう産業革命が、日本の多くの教科書に使われているような意味、つまり産業革命をめぐる諸論議のなかで古典的概念といわれているものをさしていることは云うまでもない。人類史における農耕文化の発生は第一次産業革命である。などという主張からみれば上述の疑問は生じないからである。)また、日本では近世の技術史研究もすすんでいるが、産業革命以前を産業考古学の対象にふくめてはいけないのかという疑問もあった。論議の結論だけいえば、前者については、たしかに従来の考古学という概念にはなじまないかも知れないが、遺物(遺跡)を発掘し、調査し、保存するという要求にピッタリするように思われるし、Industrial Archaeology ということばが既に一定の市民権を得つつあるのだから、これで行こうということになった。研究対象の時期区分については、産業革命以後などと限定せずに、ひろく近代産業を準備した時期をふくむことにしておこうということになった。字義をきゅうくつに確定することが問題なのではなく、調査・研究がすすめられるなかでおのずと体をなしてくることが自然であると考えられたからである。

II

産業考古学会創立の準備過程では、「学会」という名称の是非も話題になった。これは今後の研究・交流のすすめ方に関連するところがあるので特記しておく必要がある。産業考古学というかどうかは別としても、産業遺物に関心をもっているであろう全国各地の

人々を結集するには、「学会」という名称には従来から大学人中心というイメージがつきまわっている、堅苦しくないか、「研究会」の方がソフトな印象で誰もが入会しやすいのではないか、というのである。もともと意見であったが、議論の末に、調査・保存という活動は個人的な仕事としてできるものではなく、しばしば企業を相手とすることも多いであろうから社会的な位置づけもある程度考慮すると「学会」の方がよからうということになったのであり、しかし同時に、ひろく一般の人々に開かれた研究会であることをつねに強調しようということになったのである。具体的には、近年、都道府県はもちろん、各市町村でようやく設立の動きが顕著になっている博物館や民俗（資料）館のようところに働く人にはもちろんのこと、各地域に殆ど無数にいる郷土史家、この方面に関心をもっている小・中・高校の先生方などが念頭におかれているのである。

この点で興味深いのは、このような運動・研究関心の先達であるイギリスの動きである。イギリスでは、産業遺物を保存しようという呼びかけにこたえ、老若男女のいわば「素人」の運動として始められ、議論はとにかく巻尺を持ち、カメラをもって発掘・調査するグループが全国各地に自然発生的に誕生し、それらグループを連絡調整する日本流に言えば上部組織に相当する産業考古学協会が創設されたのは1973年だというのである。幸か不幸か、日本ではこの学会が東京で、いわば研究者の音頭取りで誕生したわけなので、この運動を地域に根づかせるのは、これからの課題となっているのである。

また、この学会創設の運動に関連して、これまで日本科学史学会のような既存の組織があるのに、どうして新組織をつくるのかという疑問もあると思われるので一言しておく必要がある。この種の議論があったわけではないので、以下のべるのは全くの私見であ

るが、既存の研究会（学会）は産業遺物の調査・保存・研究という限定された目的の活動のためには不向きな点が少ないこと、とりわけ、いわゆる職業的な研究者でない人々を結集するためには、はっきりした目的を提示して組織した方がよさそうだということであるように思うのである。

III

4月9日には、専修大学神田校舎で発足後第1回の研究会が開かれ、「横浜で発見された大砲」（礼沢誠蔵）、「北海道の産業考古学の現状」（丹治輝一）という興味深い報告が行なわれた。報告要旨はニュースで紹介される筈なので省略するが、50名をこす参会者のなかには、数名の技教研会員の姿があったことは報告しておく必要がある。

教育運動のなかでは「地域にねざす教育」ということがいわれ、技術教育関係者のあいだでは技術史学習の重要性が指摘されている。「地域にねざす教育」を空念仏にしているだけではいけないし、技術史学習を本に書かれている外国の技術史の学習だけにおわせてはいけないと思う。（外国の技術史を学ぶことはもちろん大切だが。）技教研の大会や『会報』でも少しづつ報告されるようになってきたが、教師自身が地域の技術史研究にとりくむならば、そのなかで生きた歴史研究についての眼が開けてくるにちがいないし、それは必ずや直接間接に授業の内容や方法を豊かにするにちがいないと思う。

（名古屋大学）

産業考古学会は、会費年二千円。事務局は〒110 東京都台東区上野公園7-

国立科学博物館工学第三研究室気付

産業考古学会

（ニュース見本や申込書は私のところにもあります。）